

## イザヤ書6章「天からの召し」

### 1A 高く上げられた王座 1-7

#### 1B ウジヤ死後の幻 1

#### 2B 聖なる御座 2-5

#### 3B 罪深き自分と贖い 6-7

### 2A 神の召命 8-13

#### 1B しもべの姿勢 8

#### 2B 民の頑なさ 9-13

## 本文

私たちの聖書通読の学びは、イザヤ書 5 章まで来ました。今朝は、6 章を読みたいと思います。そして午後は、6 章は読まないで、そのまま 7 章から 9 章前半まで読んでみたいと思います。いつもは午後の通読箇所から、一部を取り上げて午前礼拝の説教本文にしていますが、そのまま通読していきたいと思います。6 章から 9 章は、イザヤ書の中でも、ものすごく内容が詰まっている箇所です。

### 1A 高く上げられた王座 1-7

#### 1B ウジヤ死後の幻 1

1a ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。

6 章は、イザヤが神から預言者としての召命を受ける箇所です。ウジヤが死んだ年に、彼は召命を受けています。けれども、イザヤはウジヤが存命中の時から預言をしていました。私たちがこれまで読んできた 1 章から 5 章までの箇所がそれです。イザヤは、自分の働きは預言をすることであることは知っていたのですが、神から呼ばれて預言をするというのはどういうことなのか、この時に初めて悟ったのだと思われまます。

つまり、彼の召しは段階を踏んでいました。モーセもそうでした、40 歳の時に自分がイスラエル人を救うために召されていたと思っていたけれども、神に召されるのは 80 歳の時でした。ダビデもそうでした。彼が油注がれたイスラエルの王になるのは分かっていたけれども、初めはサウルに追われる身であり、実際に王になったのはずっと後のことです。

クリスチャンであれば、誰もが神の召しについて気にしていると思います。実は、神の救いに預かること自体が、神に召されたことを示しています(ローマ 8:30)。そして、神の救いを受けた者としてこの地上でどう歩むべきか、考えておられるかもしれません。今朝、神から召される、天から召されるとはどういうことか、神からの語りかけを受ける時となることを祈ります。

ここで、ウジヤ王が死んだ年に、イザヤが主なる神の王座の幻を見たということに注目したいと思います。イザヤは、ウジヤのそばにいた人で、歴代誌第二 26 章 22 節に「ウジヤのその他の業績は、最初から最後まで、アモツの子預言者イザヤが書きしるした。」とあります。ウジヤは 52 年という長い期間、ユダの国を治めました。彼は晩年に聖所の中にはいるという罪を犯し、らい病を患いますが、それまでの間は、主を求め、主の目に適うことを行っていたことでした。それゆえ神は彼を栄えさせていました。ペリシテ人など、周囲の敵と戦い、制圧し、貢を納めさせていました。彼の名声は、エジプトの入口にまで届いたとあります。それから、やぐらをエルサレムに立て、水溜もたくさん作りました。彼は農業にも従事していました。今のイスラエルの建国の父、ベン・グリオンもアラブ人との戦いで勝利を収め、退職後はネゲブを縁にするという事業のためにネゲブに家を構えたということですが、ウジヤも、似たような有能な、信頼して安心できる王だったのでしょうか。そして、精鋭部隊を持ち、優れた兵器も備えていました。

そんな中で、中にいるユダの民、エルサレムの住民は安心して暮らすことができました。けれども、霊的には、徐々に妥協が起こっていて、その不正についてイザヤが 1 章から 5 章まで預言していたということになります。けれども今、ウジヤが死にました。それまで、水道の水のように当たり前に考えていた恩恵がなくなってしまいました。自分たちが頼りにしていた覆いが取り除かれました。ウジヤが死んだのは紀元前 740 年ですが、745 年にアッシリアのティグラテ・プレセルが王位に付き、周囲の国々の侵略を開始していました。ですからウジヤが今、いなくなるとは困るという状況だったのです。いったい、この国はどうなるのか？という焦りと動揺が国中に広がっていたと考えられます。そして、イザヤ自身もそうであったと言えます。イザヤは、ユダにある不正を示されていて、それを責めていました。けれども、彼自身、ウジヤ王によって与えられていた安全に拠り頼んでいました。今、その安全が取り除かれて、イザヤ自身も衝撃を受けているのです。

これはちょうど、比較的安定した環境の中にいる私たちクリスチャンに似ているかもしれません。安定した職が与えられている。家庭もことさらに大きな事件は起こっていない。健康も守られている。指導者も健在だ。このような状況の中で、けれども主なる神を知り、この方を愛して、イエス様を信じていると言えるかもしれません。そこで、自分が病にかかった。職を失った。愛する指導者がいなくなった、となります。その中で拠り頼むべき方が誰なのかを試されるのです。

イザヤは、ウジヤ王が死んだ後で、「高くあげられた王座に座しておられる主」を見えています。ウジヤが王座についていたからこそ、もっと高いところにおられる王座が見えなくなっていた、ということが出来ます。彼は、人に拠り頼むユダの人々に対して預言して責めていましたが、彼自身もその非を免れないでいたのでしょうか。私たちは、自分の頼りにしていたもの、頼りにしていた人がいなくなった時にこそ、それまで見ていたクリスチャンとしての世界が、一気に広がる、まことの天の王座から眺める神の世界への視野が広がる良い機会となるのです。

## 2B 聖なる御座 2-5

1b そのすそは神殿に満ち、2 セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、3 互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満つ。」4 その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。

いと高きところにある王座の情景です。御座から出ている裾が神殿に満ちています。主なる神の王座が広がっている姿です。そしてその上に、セラフィムという天使がいます。「燃えているもの」という意味があります。顔と足を覆っているのは、主に対して礼拝する姿、ひれ伏し、へりくだっている姿を表しています。そして、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】」と叫んでいます。三度も、「聖なる」と叫んでいます。ここで、セラフィムは三位一体の神をほめたたえているのではないかと、とも言われています。御父、御子、聖霊の神に対しての礼拝です。そして、敷居が揺るぐほどの声ですが、これは神の栄光を表しています。ちょうど、重低音がスピーカーから流されると、振動で回りが揺れるのと同じです。そして、煙はシナイ山に主が降りてこられた時の煙と同じで、主の栄光の臨在を表しています。

ヨハネの福音書にて、この栄光が実に、主イエス・キリストご自身であることが書かれています。「12:41 イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである。」イザヤは、主イエスご自身の栄光を見たのでした。

5 そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の【主】である王を、この目で見たのだから。」

「ああ。私は、もうだめだ。」これが、聖なる主ご自身の姿を見た者の姿です。「ああ」というのは、「災いだ」ということ。「もうだめだ」というのは、「破壊される」ということです。彼は、ユダとエルサレムを指して、その不正を責め、正していましたが、今、聖なる神と主イエス・キリストご自身の栄光を見て、私こそが神の裁きを受けるべき者だと悟ったのです。五章の内容を思い出してください、イザヤは「災いだ」と言って、ユダにある悪を責め立てたのです。それが、自分自身の中にもあることを知って、愕然としています。

そして、「くちびるの汚れた者」と言っていますが、これが預言者としては致命的なことです。神の言葉を受ける預言者として、その口が清められていなければいけないのに、そこから災いをもたらす言葉も出していることに、聖なる神の臨在に触れて気づいたのです。ヤコブが信者たちに対して、「賛美と呪いが同じ口から出てくるのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。(4:10)」と言いましたが、その過ちに彼は気づきました。「くちびるの汚れた民の間に住んでいる」と言っていますが、その汚れに対して自分は預言をしていましたが、いつの間にか自分自身もそれに汚れていたことに気づきました。

このように、聖なる神の臨在、イエス様の栄光に触れた者は、自分自身に愕然とします。私たちの自画像、セルフ・イメージは、絶えず他者との比較によって形成されています。それで、自分はまだできていない、どうしようもない、とかいろいろ考えるのですが、まだまだ人間や社会との比較の中での範疇で考えているのです。絶対的な義と聖をお持ちの神の前に出る時に、それどころではない、自分の実在、存在の根底から破壊されるような、圧倒的な罪深さに気づくのです。

聖書において、主に召されて、主に従っている人々は、この出会いをしています。ヨブは正しい人ですが、最後に主ご自身が現われて、自分が悟り得ないことを告げたといって、「自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。(42:6)」と言いました。ダニエルは、神に愛された人、誰が見ても非の打ちどころがない人でしたが、主の栄光の姿を見て「私の尊厳は破壊に向いた(10:8 参照)」と言いました。そしてペテロですが、彼はこのような神々しい姿のイエス様ではなく、ガリラヤ湖の漁の現場で、自分の酷い罪深さを悟りました。夜通し釣りをしていたのに、一匹も魚がとれなかったのですが、イエス様に「網を下ろしなさい」と言われて、その通りにしたら、網が破れそうになるほど魚がとれました。そしてペテロは言いました。「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い者ですから。(ルカ5:8)」

私たちは、へりくだり、とか、謙虚ということを考える時に、絶えずこのことを思い出しましょう。「主との出会いによってのみ、初めてへりくだることができる」ということです。いかに表向き、自分がへりくだっているようにしていても、それは見せかけで、へつらいの罪から免れることはできません。主との日々の出会いによって、そこでイエス様の聖いお姿に触れることによって、その清められた心によって主に仕えることによってのみ、そこに初めてへりくだりが生まれます。

### 3B 罪深き自分と贖い 6-7

6 すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。7 彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」

完全な神の愛と恵みです。イザヤがこのような罪人であるにも関わらず、彼が何もできないにも関わらず、主が一方的に彼の不義と取り去り、罪を贖ってくださっています。セラフィムの一人が、手から祭壇の火によって燃え盛る炭を彼に持ってきました。そして彼の口に触れます。祭壇は、地上の祭壇では、牛や羊などをほふって、それを祭壇の上で焼き、主に対する火のよるいけにえをささげます。それによって、主が罪に対する罰を身代わりに動物が受けたとみなして、その罪を赦してくださいます。その罪の贖いの火をもって、イザヤのくちびるを清めてくださったのです。かつて、イザヤが預言した言葉のとおりです。「1:18 たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

## 2A 神の召命 8-13

そして、この一方的な恵み、一方的な憐れみによって、初めて主はイザヤを遣わします。私たちがこの世にキリスト者として生きていること、そしてキリスト者としてその働きの中に従事すること、それは聖なる主を見て、圧倒的な罪深さを知り、それを一気に包み込み、覆い隠すさらに圧倒的な神の恵みによるものであります。全く働きの価値のない者、ましてや全く生きる価値のないことを知った時に、主が私たちを呼び出されます。そして、もはや自分がより正しいから、正しくない人に福音を伝えるということではなく、自分が畏れ多き神の恵みを受けたから、それで主に仕えているのだ、という意識に変えられます。この出会いがあるからこそ、もはや自分の肉ではなく、御霊に頼ることができるのです。

使徒の中でも最も多くの働きをした使徒パウロが、こう言いました。「1テモテ 1:12-14 私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」パウロは律法の義に熱心な者でした。その義に熱心であったばかりに、かえって自分が何をしていたのか分からなくなっていました。キリスト者を迫害し、暴力をふるっていた者であり、そうやって神を汚していたことを、彼はイエス様に会って悟ったのです。私たちも同じように、自分が正しいと思っただけに行っていることが、実は神に反逆する行為であり、とんでもない罪であったことに気づくことがあります。そして、全き恵みによって彼は罪が赦され、救われたのです。ですから、彼は「罪人のかしら」と言っただけではばからなかったのです。

## 1B しもべの姿勢 8

8 私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」

三位一体の神がイザヤに語りかけておられます。「われわれのために行くだろうか」と尋ねています。そしてイザヤは、ここで完全な僕の姿を取っています。「ここに、私がおります。」と言っています。これは、「あなたのなさること、お語りになること、何でも従わせていただきます。」という僕の姿です。「私は、これこれのことであれば、やらせていただきます。」という条件を付けませんでした。私たちはどこかで、いつもこれをやりたい、これはやりたくない、これならできる、あるいはできないという選り好みをしています。そうした自分をどうすれば捨てることができるでしょうか？ 神の恵みによることしかできません。聖なる神に触れられ、全き魂の砕きを経験し、それから神の一方的な恵みに触れる時に、自分というものが無くなります。

それから、「私を遣わしてください。」と言いました。「お使いがあるのでしたら、どうか私を使ってください。」という姿勢です。しばしば英語においては、「主に用いられているためには、ability ではなく、availability である。」と言われます。自分ができるかできないかではなく、主に命じられることに対して、いつでも直ちに応じられる状態にしておく、ということです。

## 2B 民の頑なさ 9-13

9 すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』  
10 この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で悟り、立ち返って、いやされることのないように。」

主は、イザヤに成功しない働きを示されました。語っているのに、悟ってもらえない。見ているのに、知ることはない。「一見百聞にしかず」ではない、と言われます。なぜなら、心が肥え鈍り、耳が遠くなり、目が閉ざされるからです。これは、見たい、悟りたい人を主が頑なにさせているのではなく、彼らが頑なののに、主がそのままにしておかれるということです。

イザヤは、ウジヤの時代、ユダとエルサレムの中に不正と不義を見ました。それに義憤をもっていました。しかし実は、これからはウジヤの時代とは比べ物にならないほど、ユダが落ちていくのです。7章からは、ウジヤの孫、アハズの時代におけるイザヤの預言活動を見ていきます。ウジヤの時代とは比べ物にならないほどの、とてつもない墮落した世となっていきます。アハズが、北イスラエルのように、いやそれ以上に偶像礼拝を取り入れていきます。そして、周囲の敵から攻められて、何と北イスラエルとシリアから攻められそうになります。このような危機の時代に突入する前に、イザヤが主の王座の幻を見ることは実に幸いなことでした。安定や平和がますますなくなる時代になっている時に、はっきりと主が御座におられることを知ることはとても安心することです。どんなに時の流れが激しかろうと、主の側に付き、主のことばを語るためには、必要なことです。

そして何よりも、イザヤが恵みによって神の働きをすることができるようになったことは幸いなことです。自分の能力、自分の素質、自分というものが少しでも残っていれば、いくら自分が他の汚れから離れていると思っていようと、自分もその非を免れないのですから、その濁流の中に飲み込まれていきます。神の全き恵みの中にいるからこそ、徹底してしもべの姿を取ることができます。全ての裁きを主に任せます、自分で判断しません。自分は主が語られることをそのまま伝え、主から命じられることをそのまま行います。その他のことは主が行われる、ということを知ることができます。だから人々が反発しようと、主がここにおられ、主が恵みをもって私を召してくださったのだから、それは自分に関係のないことだと悟ることができるのです。

そして、この預言の言葉は、新約時代の言葉であり、イエスご自身の言葉であります。イエス様は何度となくこの言葉を引用されて、その時代にご自分の言葉を受け入れることを彼らが拒むことを語られました。使徒たちも引用しています。真理の言葉というのは、その性質からして受け入れ

られないものなのです。だから、私たちは語れば語るほど、それに応答しない人々の姿を見るのです。だからこそ、私たちは自分の天からの召しを確信する必要があります。人がどう反応するかによって私たちは生きません。見た目の成果によって私たちの行動を決めません。あくまでも、主の恵みの中にある、主との出会いの中にある関係、その交わりの中に生きて、その御源から力を得て生きる道を選んだのです。ですから、自分は上から、天から御霊によって生まれた者なのだという確信が必要です。そして、ここは故郷ではなく、旅人なのだ。そして、主はご自分のところに私たちを連れていくために、戻ってこられるのだという召しの確信が必要なのです。その上で、今の地上で行うことを神は命じておられるのです。

11 私が「主よ、いつまでですか」と言うと、主は仰せられた。「町々は荒れ果てて、住む者がなく、家々も人がいなくなり、土地も減んで荒れ果て、12【主】が人を遠くに移し、国の中に捨てられた所がふえるまで。13 そこにはなお、十分の一が残るが、それもまた、焼き払われる。テレビンの木や樫の木が切り倒されるときのように。しかし、その中に切り株がある。聖なるすえこそ、その切り株。」

これは、ユダの民の長い歴史を預言しています。バビロン捕囚によって、彼らの町々は荒れ果て、遠い国に移されました。そして、新約時代はローマによって紀元 70 年に引き渡されました。そして残っている者は非常に少なくなります。ここで言っている「残っている者」とは、物理的に生き残っている者という意味以上に、霊的に生き残っている者たちのことです。そうです、主に信頼している民のことです。彼らが聖なるすえ、と呼ばれます。パウロたち、イエスをメシヤとして受け入れたユダヤ人たちは聖なるすえであります。

世界は破壊へと向かっています。この日本もいつか裁かれます。神の怒りがこの世に下る時は近づいています。しかし、主イエスを自分の救いとして頼る者は、その怒りから免れるようにしてください。主は、間もなく来てくださいます。ですから、まだイエス様を自分の罪を取り除いて、救ってくださる方として信頼していない人は、ぜひ、今、この方を心に受け入れ、自分の主としてください。

### 1A 安定した王 1

1B ウジヤ王政のイザヤ

2B 安定した環境でのクリスチャン

### 2A 高く上げられた御座 1-3

1B 安定ゆえの盲目

2B 真実な御座

### 3A 災いなる自分 5

1B 聖なる神と比べる自分

2B 心の貧しい者

### 4A 罪の贖いと恵み 6-8

1B 恵みによる清め

2B 恵みによる遣わし

ウジヤは、長期政権であり、善い王であり、なおかつ軍事による安全保障もしっかりとしており、農業も盛んであった。周囲の国々をも平定しており、極めて安定していた。その中でイザヤは、預言を行っていた。したがって、比較的安定した環境の中で、主の御言葉を携えている私たちクリスチャンに当てはめることができるかもしれない。

私たちキリスト者は、天から召しを受けた者である。上から新たに生まれた。そのことを知り、自分はまったく駄目だということを知り、その上で主が罪を清めてくださった、その恵みによってこの世に遣わされている。今は悪い時代なので、ますますこの召しの確信が必要だ。